

## 極北狩猟民のスポーツ

### The Sports of Hunting-Gathering People Living in the Arctic Region

浅 尾 秀 樹

Hideki ASAO

#### I はじめに

本稿では北米のアラスカ地方に住む先住民族エスキモーが行うスポーツイベント「World Eskimo-Indian Olympics」(以下 WEIO) を紹介し、極北の自然環境で生活する人々のライフスタイルに関連するネイティブなスポーツの意義について述べる。

エスキモー、イヌイット、あるいはアラスカエスキモーとすべきかの呼称については、背後に民族名称の取り扱いにかかわる政治的・社会的問題を秘めているとの指摘もある。採集狩猟民とは野性の動植物を採集、狩猟、および漁労することにより生計を立てる人々と定義され、便宜的には採集狩猟なくして生活が成り立たない生活様式を営んでいる人々といわれる。しかし、今日では狩猟採集のみを生活手段としてきた時代からは大きく変化し、文化人類学的典型としての採集狩猟民のライフスタイルをみることは難しくなっている。

文字をもたなかった狩猟採集民の歴史記録は多くない。「狩猟・漁労および採集を基盤とする経済を営む人びとには、自ら国家をつくって自律している集団はない」ことから、「マイノリティー社会、すなわち支配される立場にある人びと(とりわけ採集狩猟民)にはもう一つの歴史がある」とも言われる。自民族のことばによる教育の権利、伝統文化に立脚した文化権などもその一つである。とりわけ問題になるのが、祖先伝来の土地に住み、アザラシ猟や毛皮獣のワナ猟として資源を活用する生業権であった。この北海道では先住民であるアイヌ民族のサケ、シカ猟が禁止され、独自の文化を継承する権利が奪われたことも無視できない。<sup>(注1)</sup>

狩猟民のライフスタイル研究の今日的意義の一つに、「自然とともに生きる」ことがあげられるだろう。「必要以上の獲物をとらない」生き方は重要な要素としてあげられてきた。けれども、極北狩猟民の社会は変容し、採集狩猟活動を行わなくなっている事例が数多く報告されている。

文化人類学的研究は、研究対象とする人々の生活をもとに行うフィールドワークによる研究・調査・資料収集を伴うものであるが、本稿はスポーツイベントの取材・資料収集を行い、さらに採取狩猟民のライフスタイルと身体活動に関する文献・資料に基づきまとめたものである。

#### II 極北狩猟民と「交易祭り」

極北とする地域は北緯55度以北と言われ、高緯度地域の自然環境は冬が長く夏が短い。11月から2月にかけて日照時間が限られ夜が極端に短く、逆に6月下旬には白夜の状態になる。エス

キモーは、シベリアの東端から、アラスカ、カナダ、グリーンランドにかけて、極北のツンドラ地帯に居住し、食料としてクジラ、アザラシ、カリブー（野生トナカイ）、そのほかに各種の魚、鳥、セイウチなどを主食とし、毛皮のためにホッキョクグマ、オオカミ猟を生業活動としていた。

極北の人々の一年のリズムは夏季と冬季に典型される。つまり、回遊性の獲物を中心に大量の食料資源を捕獲し貯蔵する春と夏の時期と、乏しい食料資源を貯蔵食物によって補う冬の時期とである。この一年のリズムは、生活を維持するための重要な役割としての「交易祭り」を必要とした。「交易祭り」は海岸エスキモーと内陸エスキモーの間にお互いの獲物や産物、例えばアザラシの油とカリブーの毛皮を交換するために、一年に一度、定められた場所で開催するのが合理的であった。また、経済的交換を目的とするほかにも、親しい仲間との結びつきをより強めるためでもあった。人々は他の集落から多くの客を招いて饗宴をはかることを中心に儀礼、歌、踊り（ドラムダンス）、競技などを交えて展開する。今回取材した WEIO の中にそれらの一部を見て取ることができる。

### III WEIO

WEIO は1961年に World Eskimo Olympics として始まり、1973年には World Eskimo-Indian Olympics となり、約半世紀に及ぶ歴史を刻む。WEIO2006は2006年7月、アラスカ、フェアバンクス、カールソンセンターにて4日間にわたり行われた。

図1は、Indian stick pull である。大人と子どもが対峙し、競技を始めようとしている。中央の女性が審判で、両者の手と棒に油を塗っている。棒は約30cm で中央から両端に先き細に削ってある。審判の合図で競技は開始され、双方が押ししたり引いたり回したりすることなく、まっすぐに相手の手から棒を引き抜くと勝ちとなる。この勝負は大人の勝利となり、会場からは両者をたたえる拍手が起る。少年は勝者との握手をしながらも、その表情には悔しさが漂っていたのが印象的であった。魚を桶から取り出すときに必要な握力を競うゲームのため、審判が意図的に油を塗って滑りやすくするのである。屋外では丸太の一本橋を移動する Greased pole walk が行われた。丸太には油が塗ってあり、滑って落ちるまでの距離を競うものである。

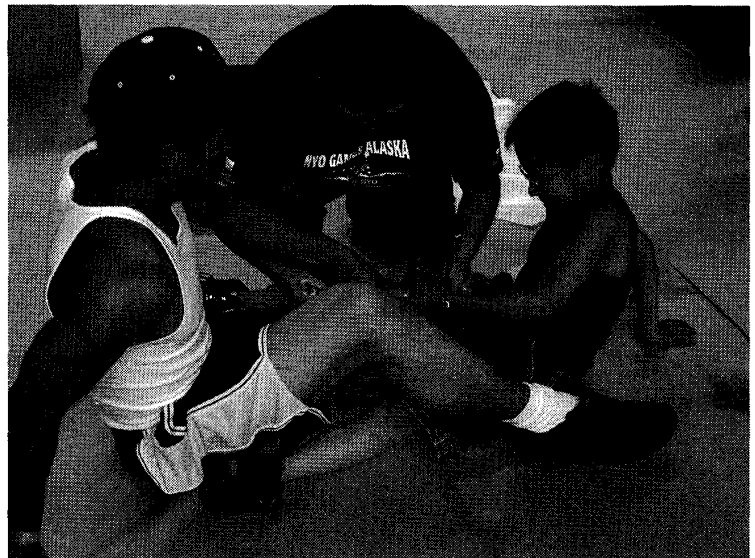


Fig. 1 Indian stick pull

また、Eskimo stick pull という競技は対座した相手との棒を引き合う力比べである。両サイドの補助者は競技者が横へずれないように足で支える。棒の握り方で内側か外側かは毎回交替して握る。この牽引力は、仕留めた獲物（アザラシ）を氷穴から引き出すときに必要な筋力を競うゲームである。狩猟民が生きるための特異な能力・体力を必要とすることを示している。

高さを競うものとしていくつかの競技がある。図2（One hand reach）は、正座の状態から片手を床につけて体を浮かせ、反対の手を上には伸ばして支柱から吊るされたボールにタッチするものである。審判は床に顔を接して、足先が床に触れないかをジャッジし、触れたときには無効試技となる。

図3は Alaskan high kick で、片腕で体重を支え、つま先でターゲットに触れ、その足で着地しなければならない。この間支持していないほうの手で反対側の足部を握っている。高さを要求されると同時に、高度なバランス性を必要とされるのが特長である。また、One-foot high kick では助走から片脚で踏み切って、標的のボールをキックする。やはりボールに触れた足で着地する。到達点は約3mの高さになる。

見ごたえのあるものの一つが Blanket toss (NALAKATUK) (図4) である。30名ほどの男女がセイウチの皮をつなぎ合わせたシートを張り、その上にジャンパーを乗せる。ジャンパーはタイミングを合わせるための小さな跳躍の動作を始める。リーダーは張り手とジャンパーのタイミングが合ってきたのを見計らい、カウントダウンする。図のように約10mの高さまで最高のジャンプを試みる。観衆の興奮とともに会場は歓喜にあふれる一瞬である。トランポリンと似ているが連続して跳躍するものではない。鯨を狩猟する集落で行われ、遠くの鯨を発見するために行われたともいわれる。クリスマスのイベントとして行うときには、ジャンパーが子どもたちの頭上からキャンディーや贈り物をまいたりする。

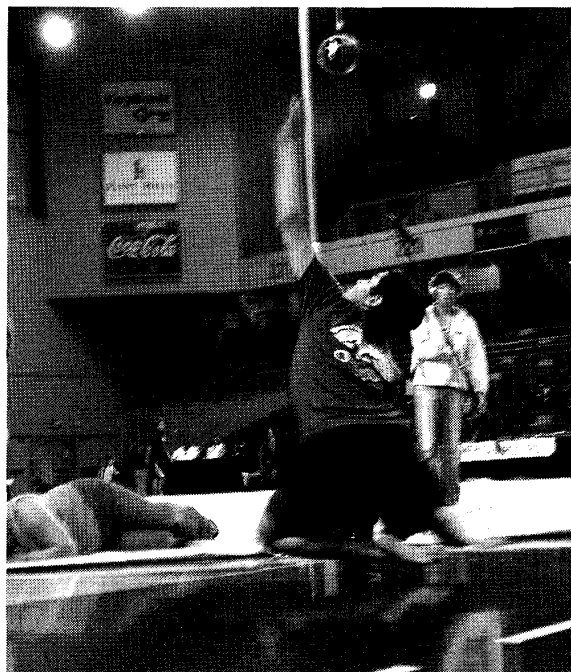


Fig. 2 One hand reach

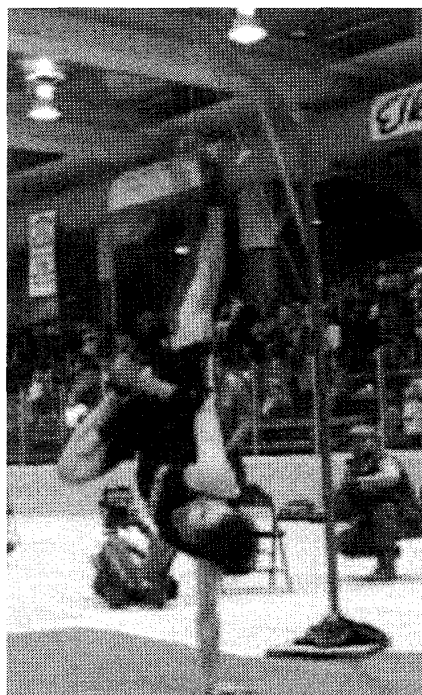


Fig. 3 Alaskan high kick

痛みに耐えるゲームがある。Ear pull は対座した両者が双方の耳に紐をかける。互いに引き合い、外れた場合や痛みに耐えられずしたほうが敗者となる。

また、Ear weight では16枚の錘を糸で耳にぶら下げ、歩いた移動距離を競う。

力比べでは Four man carry がある。競技者1人の胴体や首に、4人の男がぶら下がる。負

荷は合計で約250kgにもなるから、相当な体力が必要で誰でもできるというものではない。大猟の後、大きな獲物を担いだ帰路の喜びと苦しみの様子がうかがえる。

図5 (Seal hop) は、両こぶしと足先だけを接地して腕立て伏せの姿勢をとる。床に揺られてよいのはこぶしとつま先だけで、からだのばねを使ってジャンプし前進する。文字通りアザラシが跳ねて移動する動作となる。

Seal skinning は狩猟民の生活技術そのものが現れている。四分円型のウルナイフを用い、皮と身に解体する時間を競う。競技者一人に一頭の本物のアザラシが用意される、これには驚かされた。手際よく解体された皮だけを高く掲げるまでの時間を競う。また、Whale fat and skin (MUKTUK) は、干し肉(鯨肉の脂身)の早食い競争で、老若男女こぞって参加する。

競技は午前から予選が行われ、Finalが行われる前の夕方に、ダンスチームによるコンテストが行われる。力強い太鼓を打ち鳴らし入場した後、グループ毎に披露される。ダンスは足を踏み鳴らし、前腕・上腕を揺らしながら踊るものなどそれぞれ固有の動きである。セイウチのマスクをつけた少年が、ユーモラスな動きを表現しながら会場を沸かせる。

(図6)



Fig. 4 Blanket toss



Fig. 5 Seal hop



Fig. 6 Dance contest

#### IV 極北狩猟民の生活とスポーツ

WEIO の実際の内容について紹介した。特徴の一つが、ライフスタイルを構成する生業活動に非常に強く関わり、狩猟・採集や生活技術に関連する要素が随所にちりばめられている。集団の協力性として Blanket toss があり、体力面では、敏捷性、機敏性を競うものが One-foot high kick, Two-foot high kick である。そして、筋力・持久力・スタミナでは Knuckle hop or seal hop, Four man carry などがある。Ear weight, Ear pull などでは痛みに耐えるがまん強さが求められる。

カイヨワは「遊び」を「アゴン（競争する遊び）」「アレア（運に任せる遊び）」「ミミクリ（変身・擬態の遊び）」「イリンクス（心身を混乱に陥れる眩暈）」に分類している。ドラムダンスではセイウチのマスクを着けて頭やお尻を搔いておどけて笑いを誘うのはまさしく「ミミクリ」であり、それぞれのグループがダンスを演技した後、観衆もこぞって参加し一同が全体のダンスとなって陶酔の時間を共有することをみれば、競うゲーム性はもとより、「遊び」としての要素が十分に満たされているといえよう。

こうした技能や体力は、生業活動はいうまでもなく、厳冬の自然環境に適応したくましく生きていくために必須な能力であり、これをスポーツとして成立させているところに「人々の知恵」が感じられる。しかも、ルール・用具が極めてシンプルである。おそらくはこうした運動は、住居の中や天井の低いコミュニティーの部屋の中で行われてきたものであろう。バランスや筋力など生かした巧みなパフォーマンスを、上部から球体を一つ下げただけの低くて狭い室内空間でできる動作様式に仕組まれているところに感服させられる。

スポーツには、単に身体的な負荷としての運動だけではなく、「日常から解き放たれる」「気晴らし」の意味もふくまれる。私たちが目にする多くのスポーツは、日常を感じさせない身体的運動で行われている。今日の多くのスポーツには生業活動との関連は見ることができないし、そうした要素は商業化、経済活動の妨げとなる所以から排除され、「商業的活動の一環としてシステム化された楽しみ方」なくして成立しえない。単なる個人の余暇・楽しみ の範疇では満足されず、「頂点」といわれるスポーツになるほど政治的介入や経済的さらにはビジネスとしての「管理」と無縁には存在し得ないことに危惧せざるをえない。

近代以降、スポーツをめぐる問題はさまざまに起こってきた。そして、ビジネス優先の風潮にスポーツが曝されていると言って過言ではない。時間的スパンでとらえれば、人としての生業活動として採集狩猟の時代がその大半であった。地域で生きる人々が営む日常活動・生業活動と一体となって存在するネイティブなスポーツの中に、「スポーツの原点とも言える姿」が見えるのである。

## V おわりに

WEIO が行われる会場の一方では、バザールが開かれている。取引を本来の目的としていたとすれば、至極当然なことである。今ではそのあり様は大きく変わり、物産や土産物の店舗が並ぶ。牙製の什器、模型、装身具などのミニチュア彫刻や宗教的・儀礼的道具や護符など、器用さを誇るものが目に付き、いわゆる外部の社会の消費者のための「お土産としての芸術」が並べられている。狩猟民の生業活動や文化に触れるならば、スポーツに限定せずに考察すべきであるが、本稿の直接の目的ではないので別の機会とする。

採取狩猟民から学ぶ今日的意義の一つが、「自然とともに生きる」「地球にやさしい」の視点でのライフスタイル、ライフスキルの学びであろう。「採集狩猟民は必要以上の獲物をとらない」「自然と調和した生活を営み、過剰な消費をしない」が環境問題やエコロジーを考える上での一つの示唆となりうるからだ。しかし、狩猟民としての独自の地域社会・文化がいわゆる欧米人らとの接触以降急速な変化がもたらされ、彼ら自身も苦悩の時代を迎えているとも言える。そして、今日では採集狩猟活動を行わない、行えない環境、生業活動の変化は彼らのライフスタイルを大きく変えたといわれる。<sup>(注2)</sup>

おわりに本研究は北翔大学北方圏生涯スポーツ研究センターがすすめる「北方圏における生涯スポーツ社会の構築に関する総合的研究」の一部として行ったものである。避けられない前提が、積雪寒冷環境下でのスポーツ活動実施率の低下をどのように食い止めるかである。その一つが積雪寒冷環境を解消する方法である。高額な暖房費を投じて寒冷環境をハード的に解消する方法、つまり、どこでもできるスポーツを通年でできるようにする方法である。また、冬季に暖かい地域に短期・長期的に移動し解消する方法で、一部のスポーツ選手が行っている方式である。いずれにせよ、生涯スポーツの範疇で一般化するならば、莫大な経費が発生し、利用者や地域住民が経費負担を背負うことになる。もう一つの発想が積雪寒冷環境を逆手にとることである。積雪寒冷環境だからできることを喜びとする発想であろう。そうした視点をもつことにより、採取狩猟民のスポーツから北方圏におけるスポーツのあり方の一面を学ぶことができるのである。

(注1) 北海道の先史時代である擦文文化期の遺跡から出土されるサケ・マスなどの魚類、ヒグマ、シカ、オットセイ、アザラシなどの骨から狩猟採集社会を営んでいたとされる。「近世的アイヌ文化」期には「和人」とのあいだに、クマ・シカなどの陸獣類の皮、ラッコ・アザラシなどの海獣類の皮、熊胆などと金属製品や陶器類とが「交易」されていた。19世紀後半にはシカ猟、サケ猟が禁止され食料不足から餓死者が多数出た。明治32年にアイヌの救済・保護を目的とされる「北海道旧土人保護法」が制定された。これは米国のインディアンに対する「一般地割当法」(ドーズ法)がモデルといわれる。「アイヌの生活基盤の破壊と生活の窮乏化」がさらに顕著となり、平成9年に「アイヌ文化振興法」となったが、依然として

「先住権」「差別」「教育」などでの残された課題は多い。

(注2) 極北狩猟民は彼ら同士、隣接地域のインディアンとのネットワークで独自の地域社会・文化をもっていた。捕鯨や探検家などと「接触」が始まり、ホッキョクギツネの毛皮を大量にヨーロッパに持ち出すための「交易所」と交換に大量のライフル、ボート、小麦粉などが入ってきた。宣教師がキリスト教を広め、結核などの伝染病も入ってきた。定住化、学校教育、医療福祉サービスがはじまり、彼らの社会の変化のスピードは速まった。さらに今日では、極北地域の自然環境問題となっており、生業活動ができるかどうか、さらには生業活動の内容と意義そのものさえ変わってきたと指摘される。

## 付 記

本研究は平成16年～20年度文部科学省「私立大学学術研究高度化推進事業」（「学術フロンティア推進事業」）の助成を受けて実施した。

## 引用・参考文献・資料

- スチュアート・ヘンリほか：採集狩猟民の現在 言叢社 1997  
 岸上伸啓：カナダ極北地域における社会変化の特質について 同上書  
 大村敬一：再生産と変化の蝶番としての芸術 同上書  
 スチュアート・ヘンリ：現在の採集狩猟民にとっての生業活動の意義 同上書  
 岡田宏明：北の文化誌 雪氷圏に生きる人々 アカデミア 1994  
 岸上伸啓：イヌイト「極北の狩猟民」のいま 中央公論社 2005  
 浅井晃：カナダ先住民の世界 彩流社 2004  
 榎森進：アイヌ民族の歴史 草風館 2007  
 ロジェ・カイヨワ：遊びと人間 講談社 1990  
[http://weio.org/Webpage/About\\_WEIO](http://weio.org/Webpage/About_WEIO)  
[http://campus.u-air.ac.jp/~stew\\_hon/HTML/eskimo\\_inuit\\_tbs03.html](http://campus.u-air.ac.jp/~stew_hon/HTML/eskimo_inuit_tbs03.html)  
[HTML/Eskimo\\_inuit\\_tbs03.html](HTML/Eskimo_inuit_tbs03.html)